

ちゃんとした恋―サンプル―（前編後編含む）

「監督になるべくして生まれた人」

それが、彼へのみんなの評価だった。

「ミクくん、よろしくね」

明後日に行われる撮影の打ち合わせ。もうメンバーは知った顔ばかりなので緊張はない。未来みらいもすっかりと監督の顔を見て挨拶を返す。

「宜しく願います」

ただの挨拶―けれど監督はしっかりと目を見て笑顔を返してくれた。

「大輔くんも、よろしく」・

「宜しく願います」

監督が次々と挨拶をして、みんな和やかな雰囲気。にこにこ笑顔で、まさか今から裸体で性感を高め、女性のように高い声で喘ぎ射精する内容の台本チェックが始まるなんて…全く思えないほど。

「じゃあ、まずは最初のシーン。撮影の順番は違うけど、主人公の感情を理解するためにも台本の最初からね。撮影スケジュールはまた後で渡します」

監督が未来を見ながら言った。それにしっかりと頷きを返す。

「じゃあ、最初…ミクくんは大輔くんは恋人同士で、デートから帰って来たところ。

玄関から入って…」

台本を読み進めながら監督が言葉を止めた。

（あ、始まった…）

すでに監督は台本をチェックしてあったはずだ。しかし撮影日が近くなると急に燃え上がり、次から次へと修正をする。でもそれが全てヒットしているし、その熱意はみんなも尊敬しているので不満はない。

真剣に台本を読む監督の顔は精悍で、まるでセックスシーンを頭に思い浮かべているとはとても思えない。

（かっこいい…）

知り合ったのは一年前。二十歳で親を亡くし、途方に暮れて街をさまざまい歩いていたときにスカウトマンに声を掛けられて、連れて行かれた先の事務所で挨拶をしたのがきっかけだった。

『あれ、可愛い子連れてるな』

『今声掛けて。可愛いでしょう。でもまだこれから説明ですから』

『俺も同席していい？』

『え、ええ……』

監督は誰に対してもフレンドリーで、だからこそ誰とでもフランクに話せて。

『でも監督、今日撮影じゃ？』

『受けの子がお腹壊しちゃってね、今飲み物届けてきたところ』

そのときは内情を知らなかったけれど、今なら分かる。体調管理も仕事のうち。病気は確かに仕方ないことだけれど、撮影当日にお腹を壊すなんてもつての他。けれど監督に怒った様子は微塵もなくて、だからスカウトマンも一瞬驚いた顔をした後に笑っていた。

『じゃあ、飲み物用意してきますんで。先に彼案内してもらっていいですか』

『はいよ』

監督をバシるスカウトマン……そのスカウトマンが実はものすごく優秀な人だったと知ったのは後からで、しかもそのときは「監督が一番偉い」というイメージだったのでもとても驚いたことを覚えている。

『こっち。あ、俺監督してるの。須藤です。よろしくね』

『あつ、えつと、』

『あ、名前はいいよ』

『え？』

『説明今からなんでしょ？ 仕事するかどうか決めてないのに個人情報話しちゃダメだよ』

その言葉が監督の誠実さを物語っていた。優しく微笑んで、座ろっか、とソファに促してくれて。それで、一瞬で恋に落ちた。恐らく親を失ったばかりで心に隙間もあったのだと思う。

でも、今でも好きだから、これはきつとちゃんと恋。

監督の優しさは一年経っても——その間に何本AVを撮ってもらっても変わることはなかった。むしろ優しく……それにちよつと独占欲も見せられて。出演作はそれなりに売れているようなので、もしかしたら未来の気持ちに気付いた上で、逃がさないようにとしているだけなのかもしれない。監督はそんなことしない人だと思っているけれど、仕事は仕事だと割り切っているかもしれない。でも、「ミクくんは俺にしか撮らせない」という社長への宣言は今でも胸に残っている。

——大好き。だから、監督の役に立ちたい。未来が売れば監督の名も上がる。この

一年で出演したAVは二桁。それだけたくさんいやらしいところを好きな人に見られたのだと思うと恥ずかしいけれど、撮影で何度射精しようと帰宅すればあさましく勃起して、監督に見られているところを想像して抜いて――。

きつと今夜も勃起してしまうだろう。でも、今夜は抜けないから――。

「これ、デートどこ行った？」

「そこまでは……」

監督がスタッフさんに詳細を確認している間に、台本に目を落とす。そこには「今日は楽しかったね」「うん、楽しかった。けど早くミクに触りたかったよ」という大輔の台詞の後、『大輔、ミクの手首を持って強引にベッドに引きずり込む』とト書きが書かれていた。

「あとこれさ、待ちきれなかったなら玄関だろ。大輔くん、ここは玄関のドアを閉じた瞬間にミクくんを抱きしめて、腰を押し付けてゴリゴリして」

「はい」

みんなが一斉に台本にメモを取る。未来も同じように――恥ずかしいな、と思いつつ軽くメモを入れた。

「で、ミクくんはちよつと嫌がる素振りをして。『まだカギが』とか言つて、玄関じゃ嫌、みたいな」

「はい」

でも、もし相手が監督だったら……きつとカギのことなんて考えられない。嬉しくて、たくさん触ってほしくなってしまう。

「二人が勃起するまでゴリゴリやつて。衣装は……大輔くんは綿パンみたいな方がいいな。勃起が分かるやつ。ミクくんはジーパンで。勃起して痛いつて、どこかで台詞入れるから」

「はい」

恥ずかしい指示。好きな人に他人とのセックスを指示されている。でも、不思議と監督以外に触れられたくないとは思えなかった。もちろん付き合っているわけではないので監督に触れたことなんて一度もないけれど、好きな人ができたらその人以外嫌と思うのが普通のはずなのに……出会いが会いだったからか、監督にいやらしい姿を撮ってもらうことが嬉しかった。それに監督は未来をしつかりと見てくれていて、魅力がたくさん引き出してくれるから。

「カメラは……そうだな、大輔くんは舌が映るようなキスにして。それを撮ってからテイルトダウンして腰を撮ろうか」

「はい」

カメラさんも照明さんも台本にどんどんペンを走らせていく。大輔も書き留めていたけれど、未来はしない。部分的には書くけれど、許可を得て録音させてもらっているのだ。家に帰って、この監督の声を聞きながら脳内で何度もシーンをイメージする。そうするとまるで監督に見られているみたいで——勃起が苦しくなるけれど、その方が頭に入るのだ。

「それから…：ベッドシーンは台本のままでいいな。ただ、大輔くんなんだけど、ミックくんを脱がせたとき、玄関では嫌って言うたくせに勃起してちよっと笑って」嫌って言うたくせに勃起——明言はされなかったけれど、ここでカメラは未来のペニスズームで撮るのだろう。それを監督にも見られてしまう。

（他人のキスで勃起したペニス…：）

でもきつと勃起する理由はキスよりも監督に見られているからという意識によるものの方が大きい。だってもし他の人が監督だったら——いや、そもそも仕事自体受けないから分からないけれど。

「で、セックスの内容は——…：」

それから二時間、みっちり監督の台本修正が入り、解散となった。

「お疲れ様でした」

「ミック、今回もよろしくね」

「こちらこそ。宜しく願います」

大輔との共演ももう五回目。普段から穏やかで優しいし、撮影中も細やかな気配りをしてくれる。本人は「だから恋人ものしか仕事が来ない」と悩んでいるようだけれど、優しさが売りで実際に人気があるのだからむしろどんどんそれを売りにしていけばいい——と思うのだけれど、それを言ったら「恋人が何人いるんですか？」という女性からの手紙が届いたと困ったように笑っていたので難しいところだな、とも思う。

「今回もいつも通り秘密の合図を使おうね」

「はい」

秘密の合図——それは、本当に無理だと思った時に相手に知らせるためのものだ。撮影を中断させることなくスムーズに進めるためのもの。受け身から言い出すと攻めを貶しているような印象を与えてしまうので言いくいけれど、大輔はこうして自ら言ってくれるからとてもありがたい。安心して撮影に臨むことができる。

「じゃあ、また三日後に」

「はい。宜しく願います」

関係者への挨拶も終わり、最後に監督に挨拶をして帰ろうか…：と思ったけれど、どうやら監督は小道具さんと打ち合わせをしているようだった。真剣なその様子にどうし

たらしいものかと悩む。

(挨拶のただけに声掛けたら邪魔だよね……)

かと言って、そのためだけに待っているというのも重い気がする。そう思ってしまうのは恋心を自覚しているからかもしれないけれど、重いと思われなかったとしても気を遣わせてしまいそうだ。ちらりと視線だけでも合えば会釈することができるのに——しかし、どれだけ見つめていても監督が未来の視線に気付きはしなかった。

(真剣だもんな……)

中には所詮AVなんて言い方をする人もいる。けれどこのスタッフはみんな真剣で、とにかくいいものを作ろうと妥協はしない。人気があるからというのものもあるかもしれないけれど、それだって最初の一步があったのだ。そのときから真剣にいいものを作ろうとしてきたからこそ今がある。

(ゲイビデオ、最近は女性も多く観てるって言ってたし、頑張れば需要はもっと増えるんだろうな……)

今だって、たくさんの出演料をいただいている。たった数日で終わる撮影でこんなにいただいてもいいのだろうかと思う程の額。しかも出演本数が増える度に増えて来て、今ではもう……どうしよう、と思うくらいだ。なので申し訳なく思うことも多いけれど、一生続けられる仕事ではないと思っっているので大事に貯金することになっている。趣味がなく、生活費以外に使うことがないというのもあるけれど。

(うーん……まだ終わらないかな……)

何か問題でも起きたのだろうか。そう思うけれど、出演するだけの未来に手伝えるかどうかは分からない。それにまだまだ話も終わらなそうだし帰ろうかな、と腰を上げた瞬間、監督に名前を呼ばれた。

「ミックくん！」

ドキリとした。だつてずっと存在にすら気付かれていないと思っっていたのに。

「ごめんね、ちよつといい？」

「はい！」

席を立ち、監督と小道具さんのところに駆け寄る。

「どうしましたか」

「ミックくん、ミックくんだったら恋人とどこにデート行きたい？」

「……え？」

トラブルじゃなかったのか——というか、一体何の話をしているのだろうか。

「ほら、デートの帰りでしょう。最近の若い子はどこにデートに行くのかなって。もしテーマパークとかならお土産の袋とか持っていそうだし」

どうやらかなり細かいところを気にしていたらしい。ちらりと小道具さんを見ると苦笑を返された。けれどそれに気付かない監督が先を続ける。

「ミクくんは普段どんなデートしてるの？」

——その無邪気とも言える質問に、胸がツキンと痛んだ。けれどその直後、「監督、それセクハラですよ」という小道具さんのツツコミに思わず笑ってしまった。監督もまた笑いながら驚いている。

「え、マジで？」

そのおかげで少しだけ胸の痛みがマシになった。気持ち切り替え、はっきりと返す。

「あの、すみません、僕デートしたことないので分かりません」

「え、そうなの？」

二人が声を揃えた。そんなに遊んでいるように見えるだろうか、と思ったけれど、ゲイビ男優という仕事をしている以上、そういう印象を持たれてしまうのは仕方がないのかもしれない。

「お付き合いしたことなくて」

「え……え、待って、じゃあさ、ミクくんの初めてのセックスって……」

「ちょ、監督！」

小道具さんが焦った声で遮った。でも、もういいのだ。

「はい、お仕事です。監督に撮っていただいた一本目の」

「……マジか……」

そういえばセックスの経験について訊かれたことはなかったな、と思い返す。きつと男優の道を選ぶくらいだから未経験なんてありえないという意識があったのだろう。

「相手は……」

「雄之助さんです」

「雄之助くんって確か……」

驚いたのは小道具さんで、監督は片手で目を覆っていた。

「あの、でも、いい経験になったっていうか……」

監督が指示してくれたので、とは言えなかった。普通ならやはり好きな人との初めてを望むだろう。確かに監督に初めてをもらってもらえたら嬉しかった。でも仕事だったし、初めてが監督の指示通りのセックスだったのはよかったな、と思っている。

「でもSM……でしたよね、雄之助くん……」

「ああ……」

SM……あれはSMだったのだろうか。痛いことも苦しいこともなかったけれど。

「羞恥プレイ……だったね」

「はい」

攻め役である雄之助に言われるがまま、身体を曝した。自ら服を脱ぎ捨て、ペニスを
持って雄之助に向けた。

「あ、で、えっと……デート、役に立てなくてすみません」

このままだと空気が悪くなってしまいう気がして、強引に話題を戻した。けれど謝って
しまったせいか余計に小道具さんに申し訳なさそうな顔をさせてしまい、焦る。

「あ、あの……えっと……ぼ、僕だったら水族館に行ってみたいです」

「え？」

「す、水族館……」

デートをしたことがないと言っただけで十分で、わざわざ願望なんて言う必要はな
かったのに。でも監督は頷いてくれた。

「じゃあシャチのぬいぐるみでも持って帰ってくることにしようか。彼氏に買ってもら
って、これから毎日一緒に寝るやつ」

「はい！」

現実の話でもないのに、頭の中では監督にシャチのぬいぐるみを渡されるシーンが浮
かんた。「俺がいなくて寂しいとき用」なんて言われて、でも可愛くて監督と一緒にい
るときでも抱っこしてたら「俺がいるのに」なんて嫉妬されたりして。

「じゃ、シャチの……四十センチくらいかな。大きめのぬいぐるみ用意して」

「分かりました」

監督に領き、小道具さんは足早にミーティングルームを出て行った。その背中を見送
りながら、いつの間にか室内には監督との二人きりになっていたことに気付く。

「……ごめんね」

「え？」

「初めてだったなんて知らなくて。確認するべきだった」

「あ……いえ……いい思い出になりました」

その言葉に嘘はない。だから笑顔で言ったのだけれど、監督は眉を顰めた。しかし話
題を引きずるのはよくないと考えたのか、視線を逸らして口を開く。

「……準備、できる？」

「え？」

「大輔くんの、大きいから」

「あ……えっと……はい……」

恥ずかしい。でも大事なこと……頭では分かっているけれどどうしても恥ずかしい。

「……ごめん、そうだよね。大輔くんと共演が初めてでもないのに……」

監督は少し混乱しているようだった。でも、別に初めてのセックスが仕事だったからといって気にする必要はない。監督は監督の仕事をしただけだ。未経験のくせに撮影に挑んだのは未来なのだから。

「あの、監督……」

フオローなんておこがましいことはできないけれど、本当に気にしていないことを伝えなかった。けれど遮るように、口を開かれて。

「若いから……禁欲はつらいと思うけど、ごめんね」

「いえ……！」

なんだか謝られてばかりだ。それに打ち合わせから撮影まで射精禁止なのは今までと同じ。アナルを十分に柔らかくしておくことだって。

「明日と明後日、のんびり過ごします」

「……うん。もし体調が悪くなるようなことがあれば遠慮なく言ってね」

「はい。じゃあ……えっと……お疲れ様でした」

「お疲れ様。気を付けて帰ってね」

本当はもう少し話したかった。でも話題も見つからなくて。

（でもちよつと話せた……）

それだけで気分が上がる。まるで小学生みたいだけれど、撮影の関係でもない限り顔を見ることすらできない人なのだ。だから、たったこれだけのことで嬉しくなってしまう。

（申し訳なかったけど……）

初めてなんて言わなければよかった。でも嘘は吐けなかったし、あんなに気にさせるとは思わなかったのだ。優しい人だというのは知っていたけれど、それなりに「仕事」とか「自分の選択」と割り切れるタイプだと思っていた。

（それくらいの気持ちじゃないとＡＶ監督なんてやっていけなさそうなのに……）

でもまた新しい一面を知ることができた。心なしか足も弾む。

（三日後……）

今日帰宅したらすぐ、打ち合わせの音声を聞き直す。絶対に勃起してしまうしイきたくなってしまうけれど、ちゃんと我慢して、飢えた身体を監督に見てもらおうのだ。

恥ずかしいし緊張するけれど、楽しみ——……。

「おはようございます」

「あ、おはよ。準備大丈夫？」

「はい」

幸い監督は先日のことを引きずってはいないようだった。普段通りに挨拶をして、普段通りの確認をされる。

「体調は？」

「ばっちりです」

「禁欲できた？」

「えっと……はい……」

「ん？」

「や……えっと、大丈夫です」

ちゃんとオナ禁はした。でも家にいる間ずっと勃起しっぱなしで苦しくて……そのことをつい思い出してしまったのだ。

「何か不安があれば……」

「いえ、大丈夫です！ ちょっと緊張しちゃって……」

「何か飲もうか」

気配りもいつもと変わらない。なのに、恋人がいないと宣言してしまった後だからか、なんとなくそれについて言及されることを期待してしまっている。

自販機に向かう背中を見ながら後を追う。監督は体格も顔もよくて、それこそ男優をしたら人気が出そうなのに——浮かんだ思考は頭を振ってかき消した。男優だったら仕事で抱いてもらえたかもしれないと思っただけ、そうだったら他の人のことも抱くということだ。未来が複数の男優に抱かれているように。

「コーヒー……はまずいね」

「すみません」

撮影中、尿意は感じたくない。そういうプレイのときは飲むことを推奨されるけれどブラックコーヒーは苦手で、わざわざADさんが牛乳を買いに行ってくれた……のは何度目の撮影だっただろうか。

ガタンという強い音の後、差し出されたのは桃ジュースだった。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

好みを覚えていてくれている。それだけで、勝手に頬が上がってしまう。

「あ、そうだ。小道具なんだけど、なんか可愛いシヤチのぬいぐるみがあったみたいだよ」

監督は自分の分を買おうとはしなかった。わざわざ未来のためだけに自販機まで来てくれたのだ、と思うとまた顔がにやけそうになってしまう。

「そうなんですか」

「だらしのない顔を隠すように俯きキャップを開ける。ぐっと力を入れると、大きな手が差し出されたのが視界に入った。」

「貸してごらん」

「あ、いえ、自分で……」

「これくらい開けられる。ジャムの瓶ならたまに困ることがあるけれど、ペットボトルのキャップくらい。」

「いいから」

「さっと取り上げられたボトル。軽いプシュツという音と共に甘い香りが漂った。」

「体力使わないの」

「すみません……」

「つて、それなら開けてから渡せて話だよね」

「監督がおかしそうに笑う。きつと、普通の人なら——監督に恋をしていない人なら同じように笑えるのだろうか。でも未来には笑うなんてできなかった。恥ずかしい……違う、照れ……違う……ときめき、みたいな。心臓がどきどきして、ばくばくして。笑顔を見るだけで体温が上がるし、しかもまるで大切な相手になったような錯覚をしてしまう。」

「あ、それで、小道具なただけどアイツ何買ってきたと思う？」

「え？」

「ほら、デートの。水族館デートの」

「あ……えつと……」

「水族館で売っているお土産——そもそも水族館に行ったことがないのでよく分からないけれど、水族館というからには水辺の生き物だろう。」

「イルカ……とかですか」

「んーん、あのね……マンボウ」

「マン……マンボウ、ですか……」

「それくらいは知っている。でもシヤチの代わりにマンボウとは……発想が小道具さんらしくて思わず笑ってしまった。」

「俺も思わず笑っちゃったよ。でもよく見れば結構愛嬌のある顔っていうか、可愛い顔してるよ。気に入ると思う」

「まるで、未来の好みを知っているような——飲み物とか、感部なら知られていると分かっているけれど。嬉しくて、でも何て言ったらいいのか分からなくて。それで黙っていると、監督が腕時計を見た。」

「あ、そろそろ時間か。緊張しても大丈夫。ベッドの上では可愛いマンボウがついてる」

から」

「はい」

ジュース、ご馳走様ですと頭を下げると、「みんなには内緒だよ」と言われてまた、心臓が高鳴った。

撮影開始直前、マンボウの入った袋を探していると「あれなら監督が気に入って、前回のデートで買ったことにするってベッドに置いた」と小道具さんに言われてまた、盛大に笑った。

『んっ……！ んうっ……大輔くん、ダメ……』

『なんでっ？』

アパートの部屋を模したセットの中。玄関ドアに背中を押し付けるようにして強引なキスをされる。

『んんっ……あっ、』

ゴリ、と硬いものがペニスを潰した。

(もう起つてる……！)

いやらしい。えっちな。だってまだ撮影は始まったばかりで、キスしかしていないと
いうのに。

(それとも撮影前から……？)

プロだから、脱ぐときには必ず勃起していないといけない。中には薬を使う人もいる
ようだけれど、大輔はそんなものには頼らないだろう。

『んんっ……んっ、大輔、くんっ！ カギっ！』

『ああ』

荒っぽい返事。そして腰の辺りで「カチャ」という軽い音が聞こえた。

『これでいいだろ？』

『やっ！ こんなところで……』

ドアの前を誰かが通ったらどうするの、と言うと、大輔の口元が歪んだ。

『聞かせてやればいいよ。恥ずかしいの好きでしょ』

『やあっ！』

荒っぽい言い方。でもこれも演技……演技の中の演技だ。「ミック」がMだと知っている
「大輔」がわざと合わせてくれているだけ。

『あっ……大輔くん……』

ゴリゴリとペニスを潰される。強い。少し痛い——でもそれに感じてしまう。

(監督が見てる……)

撮影中、スタッフの方を見ることはご法度だ。中にはサインを確認するのに視線をやってしまう人もいるけれど、監督は決してそれを許さない。最初は不安でつい見てしまつて、その度撮影が中断されて……でも監督は怒らなくて、「不安だよね」と気持ちに寄り添ってくれた。

『でも、ちゃんと見てるから。ミクくんがつらくないか、痛くないか、ちゃんと見てる。つらそうだなと思つたら止めるから、大丈夫だよ』

そう言つて気持ちを落ち着かせ、撮影が無事に終わった後は「あのときこういう顔してたよ」「あのときは乳首が膨らんでた」と、ちゃんと見ていてくれたのだと思えるような言葉をたくさんくれた。だからもう、安心して撮影に集中することができる。

『んっ、やっ、大輔くんっ……!!』

本当は嫌じゃないくせに……そう思いながら、いやいやと首を振つて大輔の首に腕を回す。

『大輔くん、もうっ……』

ぎゅうつと甘えるように抱き着くと、突然身体が宙に浮いた。

『わっ!!』

(腕を引つ張っていくんじゃないの?!)

でもカメラは止まらない。強引にベッドに入るなら方法は何でもいいのかもしれない。

『ミク、玄関ですの嫌だった?』

ベッドに下ろされるとさっきまでの荒っぽさがなくなった。優しい話し方は普段の大輔と同じ——けれど大輔は辱めるためにわざと耳元で声を出す。

『ミク……』

『んっ……だつてやだ、大輔くん以外に声聞かれるの……』

やだあ、大輔くんだけがいい……とさらに甘えると大輔が笑つた。

『嫌つて言いながらおちんちん起つてる』

『あっ!』

すり、と大きな手が前立てを撫でた。でも監督に言われた通りジーパンだ。硬い生地なので触れても分からないはずなのに。

『あつやあつ』

『嫌? そっか、今日ミクのおちんちは狭いところにいたいんだ』

『っ……』

台本にはない台詞。リアリティが増すから、とたまに監督が入れるわざだ。未来がないところで攻めと打ち合わせ、こうして不意打ちでいやらしいことをしてくる。

(間接的に虐められてるみたい……)

監督はただ抜ける映像を撮りたいだけ。だから『未来』を虐める意図はない。なのに――……。

『あああっ!』

撮影中は集中しなくてはならない。仕事だし、攻め役の人に失礼だから。でもどうしても、監督のことが頭に浮かんでしまう。

『あっ、あっ……』

大輔の台詞の全てを、監督が決めたのだとしたら、それはつまり監督が「こう言えば未来は感じる」と思ったということなのだ。だから攻めの言葉は監督の言葉。他人を使つて、監督に抱かれている――。

『今日はすごい感度がいいね。デート中我慢してた? それとも玄関で勃起したのが恥ずかしかった?』

『あっ、あっ……』

ぐりぐりとペニスで股間を潰される。気持ちいい。恥ずかしい。もっと――もっと見てほしい。画面越しにこのいやらしい身体を見て、使える感じ方かどうか判断してほしい。

『大輔くんっ』

『ん?』

『もう、きつい……』

~~~~~

「いろんな人にたくさん気持ち良くしてもらっている『ミク』が、どんな風に自分でするのか……ファンはみんな気になってると思う。だから台本も仕込みもなしで、撮影も俺と二人きり」

「え……?」

「カメラは俺が持つから。未来くんはいつも通り……オナニーがいつも手だけなら手で。玩具を使うなら……そうだな、オナホールを使うとしたら手で持つタイプなのか据え置き型なのか……据え置き型なら、どんな風に腰を振るのか……実際に普段未来くんが使っているものを使つて撮りたい」

まるで独り言のように続く言葉。きつと監督は今頭の中でいろんなオナニーの方法を想像し、話すことでまとめているのだろう。

「撮影は勃起する前から撮るよ。リラックスしているときから、ペニスがどんな風に勃起していくのか……全部撮りたい」

「っ……監督……」

えっちな声。熱のこもった……まるでセックス中のような。でも監督の熱は性欲ではなく、きつと仕事への情熱だ。

「乳首も弄るのかな……自分で焦らしたりするのかな」

「っあ……」

ペニスが勃起してしまった。むずむずする。

「や、監督……」

「……嫌かな？ 俺と二人で……俺の前で、みんなに見てもらおうためのオナニーを撮影するの」

「や、じゃ……それは嫌じゃない……です……けど恥ずかしい……」

台本もないということは本当に自分のやり方であることになる。もし演技しようものなら一発で監督にバレてしまうだろうし、そんなことをする技術もない。

「うん、その恥ずかしがってる顔も撮りたい。みんなが未来くんのオナニーを観てオナニーするんだって思いながら……いや、でもそれは考えなくていいな……」

「え？」

「普段からそういうことを考えてオナニーしているならそれでいいけど、想像する内容まで含めて普段の、自然体の未来くんがいい」

「……そんな……」

でも、撮りたい。しかも監督と二人きりなんて――。

(あ……!!)

でも、それはダメだ、と気付いた。だって、普段のオナニーなんてオカズは全て監督の声なのだ。頭の中で撮影のときのことを思い浮かべて勃起させることはできるだろうけれど、いつもボイスレコーダーを起動させて、それで監督の射精の指示の話のタイミングに合わせて射精する。冒頭から聞き始めるとそこまで行きつくのに一時間から二時間かかることもある。それでも必死に耐え、いきそうになれば撫でるだけに留め、それでまた落ち着いてきたら激しくして……身体は興奮状態を保たせた状態でそこまですっごく。

「ん？ やっぱり嫌？」

「あ……えつと……その……嫌じゃないんですけど……その、オカズ、が……」

本人相手に「監督の声で抜いてます」なんて言えない。それに、どちらにしても台本チェックの音声なんて外部に漏らすわけにはいかないものだ。

「うん？ 恥ずかしい？ それとも女の子の出てるAVとか？」

「あ、いや……それは……」

過去、女性に恋をしたことも興奮したこともない。相手は男性だけ。だからそこは大丈夫なのだけれど――。

「……言いたくない？」

「あ……」

傷付けたかもしれない。家にまで入れてもらってベッドまで貸してもらって。それなのに、秘め事なんて。

(でも言えないよ……)

言えば、告白と同義だ。いや告白と受け取ってもらえたらマシな方。だってもし……もし、恋愛感情のない相手に「オカズにしています」なんて言われたら……男優なのだからそれが仕事なのだけれど、未来だって仕事仲間に言われたらちよつと気まずいと思ってしまう。男優ですらそう思うのだから、監督はもつときついだろう。セクハラにもなりそうだ。

「……えっと……その……」

「あ、もしかして……好きな人、いる？ 好きな人の写真とか動画とか、そういうの？」

「あ……」

どうしよう。そうだとしたら、監督以外の人を好きだと思われてしまう。でも違うと言えば嘘になる。

「……ごめん、じゃあ台本用意しようか」

「あつ、や……」

明らかに下がったトーン。きつと監督は二十本目をどんな作品にするかずつと考えてくれているのに。

「……あの……お、音……なんです」

「音？」

「その……だ、台本チェックの……ときの……」

「ああ、録音してたね。撮影の内容を考えながらオナニー……してるの？」

途中で空いた間。ねっとり、じつくりと訊かれているようで興奮が高まってしまう。

「つ……すみません、仕事のものなのに……」

でも言うしかなかった。それに、こういう言い方をするしかなかった。でも嘘は吐いていないから。ただ、「監督の指示」に興奮していることは伏せさせてもらったけれど。

「ううん、いいよ。じゃあ撮影のときのことを思い出してすることもある？」

思い出してすることも……というレベルではない。抜くときは毎回思い出している。

「……はい」

「そう……えっちだね。でも撮影のとき、未来くんとっても気持ち良さそうだからそのときの快感を思い出しちゃうのかな……今まで撮ったやつで一番オカズにしたのはどの作品？」

「っ……や、あの……」

珍しくぐいぐい来る。仕事巾なら、様子を見て終わってくれるのに。

「……えっちな顔になってる。オナニーのこと訊かれていやらしい気分になっちゃった？」

「っ……あっ……」

腰の辺りがぞくつとした。今までに一度だって聞いたことも見たこともないほどのセクシーな声、表情。

（こんな顔でセックスするのか……）

どうしても、監督のそういうところを想像してしまう。どんな風にするのだろう……と。

「カメラテスト、してみる？」

「え？」

「疲れてるだろうから、射精まではしなくていいよ。でもどんな風に撮られるのか……確認」

「あ……」

もう疲れなんて感じていなかった。さっきまで確かに腰は怠く、股関節も痛かったはずなのに。

「んっ……監督……」

でも「撮って」と言えるほどの勇氣はなかった。まだ理性がどこかに少しだけ残っている。

「カメラ持ってくる。俺のベッドで……自分でペニスを出せる？」

「っ……」

（もうダメ——）

好きな人にこんないやらしいことを言われて、平気でいられる人なんているのだろうか。

「かん、とく……」

「待ってて」

監督はさっとベッドから降りると寝室を出て行った。一人になった途端、少しだけ頭が冷静になる。



(今から…：監督の前でオナニーするの…：?)

でも今日はボイスレコーダーを持っていない。あれは打ち合わせのときにしか使っていないのだ。

(どうしよう…：)

撮影中、流れて自分のペニスを扱いたことはある。攻め役の男優さんに手を導かれ、アナルを穿たれながら自分で前を慰めた——けれど、こんな、セックスで朦朧としているわけでもない状態でオナニーするなんて…：。

恥ずかしくて、毛布を頭からかぶった。途端、ぶわつと監督の匂いが強くなる。でも顔を出しているなんてできなかつた。だってカメラを持って戻ってきた監督に、一体どんな顔をしたらいいいのかが分からない。

(恥ずかしいっ…：)

どうしてさつき断らなかつたのだろう。二十本目がオナニーになることはかまわない。でもこんな、監督のベッドの上でカメラテストなんて——。

「かくれんぼしてる」

「っ…：あ…：」

監督がいると分かっているながら、隠れ続けるなんて失礼なことではできない。恐る恐る顔を出すと、監督が楽しそうに笑っていた。

「可愛いことしてる。恥ずかしくなっちゃった？」

「…：はい…：」

「勃起、してない？」

「それは…：」

している。

(でも勃起してないところから撮るって…：あ、けどそれは本番の話か…：)

カメラテストは実際の撮影でもしているけれど、二人でなんてどうしたらいいか分からない。だって意識が監督に集中してしまう。

「テストだから、勃起したままでいいよ」

「はい…：」

一人の時間に少しだけ落ち着いた心はもう痛いほどに鼓動が強くなっている。

(今から…：する、の…：?)

本当にするのだろうか。こんなシチュエーション、それこそAVみたいだ。

「本番も、俺と二人だから同じだよ。尺は二時間を予定してる」

「えっ、二時間もですか…：」

相手がいれば、導入部分も含めてそれくらいになることはある。けれどオナニーで二

時間は厳しい。

「ああ、でも一回じゃなくていいんだ。未来くんのファンの人はみんな未来くんが感じやすくすぐにイッチャウ子って分かっているから、数回分のオナニーをまとめようと思っ  
つて」

「っ、や……そんな……」

「感じやすいところも人気の理由の一つだよ」

フォローになっていない。いや、早漏だという自覚はあったし、毎回監督にもすぐにイッてしまう前提で台本を用意してもらっているのだからそれはかまわないけれど、こうして面と向かってストレートに言われると恥ずかしい。

「そうだな……一日に二回しちゃうっていうのもいいね。二回目は一回目より少しいくのが遅くなるかな……それからそのあとは二日空けて、一週間空けて……ってするのもいいね。きつと一週間ぶりのオナニーは我慢できなくてたくさん弄っちゃうだろうし」  
「っ……あ……あ……」

そんなに何日も撮るといことはつまり、それだけ監督と二人きりになるということだ。何度も自分で服を脱いで性を曝し、いやらしい姿を見せるのだ。

「あ……あっ……」

「感じて……想像だけでイけちゃいそうだね」

「っ……や、そんなの無理……」

「うん、じゃあ、どうしようか。普段は手？ それとも……ああ、前にローターを裏筋にあてられてそれだけでイっちゃったこともあったね。あのままローター射精にはまっ  
て家でもそうしてるとか……ない？」

「や、そんなっ……」

手だ。だって大事なのはオカズだから。監督の言う通りペニスはすごく感度が良くて、だから抜くのが下手でもオカズさえよければ簡単にイッてしまうことができる。

「まずはいいよ、好きにしてみて」

「あの……ほ、本当にするんですか」

「今は仕事じゃないから、いやだったらしなくていいよ。でも撮るとなれば、同じよう  
にしてカメラテストもするし、えっちな姿をたくさん撮るよ」

「……します」

それでなくても多忙な監督の時間をいただいている、と思うとしないわけにはいかな  
かった——というのは、きつと自分への言い訳だ。だってもう、ペニスは解放を求めて  
いる。

「……あの……あまり見ないでください……」

「見るよ。いつも通り、えっちな未来くんのこと全部見る」

「っ……」

見てほしい。見て、と言いたい。でも淫乱だなんて思われたくない。

「……はい……」

布団をどかし、座ったままズボンを下ろす。借りたものなので緩くって、骨盤に引っかかることもなく簡単に脱げた。

「未来くんはオナニーするとき、下だけ脱ぐ？」

「あ……」

そうか、普段通りのオナニーをしなさいといけないんだった。

「……全部脱ぎます……」

「へえ、珍しいね」

「っ……そう、ですか……」

そうなのだろうか。でも確かにペニスを擦るだけなのだから下だけ脱げば十分だ。いや、下着をずらすだけでもいい。なのに全裸になるのは視線を感じたいからだ。あるいはずのない視線を、全身に浴びることを想像しながら。

下着一枚の姿になると、寒くもないのに身体が震えた。ぶるつと一度、たったそれだけに、監督が心配そうな声を出す。

「寒い？ エアコンつけようか」

「いえ、大丈夫です」

これは興奮だ。武者震いのようなもの。

「……あの……」

「ん？」

「その……今日はボイスレコーダーがないので……」

「ああ、そっか。じゃあ……どうしよう？ 俺が台本チェックしてる風に話すだけじゃ足りない？」

足りる。十分だ。むしろ意見する他の人の声が邪魔に思えていたくらいなのだ。でもそれを言えば、オカズの対象が監督なのだとバレてしまう。

「……きよ、今日の撮影の感想を……聞かせてください」

気持ちが悪くしてしまうかもしれない。でももういいや、という気持ちもあった。バレたらもう今のような関係はなくなってしまうかもしれないけれど、もうイきたくて。オナニーを見てほしくて。

「ん。分かった。今日は……そういえば今日はいつから勃起してたのかな……玄関のシーン、デニムだったからカメラをアップにしても分らなかったな」

カメラをこちらに向けた監督が言った。レンズ越しの視線を感じながら目を閉じて撮影中のことを思い出す。

「ん……あ……」

見ないように、目を閉じたまま下着を下ろした。足から引き抜いて、パタンと背を倒して仰向けになって足を開く。そしてそっと、ペニスを握る。

「玄関入って……大輔くんにキスをされたね」

「は、いっ……」

もういきそうだ。だって、こんな贅沢なオナニー。

「キスで起った？ それともカメラが回る前から興奮してたかな」

「っ……キス、で……」

正確にはキスをしているところを見られている、と思ったところで、だ。

「そう……未来くんはキスが好き？」

「っ……」

あまり好きではない。好きな人と……してみたい。無言を答えと受け取ってくれたのか、それ以上は訊かれなかった。代わりに、言葉責め。

「ペニスの状態の変化、気付かなかったな……一台はずっと股間のアップだったんだけど……勃起の瞬間が見えなかった」

「あっ……」

「それは今も……だね」

「っ……」

もうペニスからは水音が出ている。いきそう。でももつと、自分にだけ向けられたいやらしい言葉を聞いていたい。今いつたらもつたいたい。

「次の撮影のときは勃起の様子をちゃんと見たいな。撮影前に勃起しちゃったら、落ちてくまで待ってから始めよう。どんな風に大きくなるのかな……」

「っ……あ、ダメ……」

「ん？ もういきそう？ まだ勃起のタイミングの話しかしていないよ」

早漏だと知っているのに。知っているとさっき言っていたばかりなのに。

(意地悪っ……)

普段の指示は優しいセックスが多いのに、本当の監督はちよつと意地悪をするのが好きなのだろうか。

「玄関じゃダメって言いながら、顔がとろとろになってたよ。あれは演技じゃないよね。ちゃんと感じてた。ペニス、大輔くんのペニスに潰されて痛かった？ それとも気持ち良かった？」

くくく

「あの、仕事の話してください」

「仕事の話？」

「次の、遠足の」

上体を離してみるけれど、引き留められるようなことはなかった。だからそのまま、ソファから降りて床に座り、監督を見上げる。

「砂場から始まる、んですよね？」

撮影当日――。

「今日はよろしくお願いします」

「よろしく」

男優さんはまだ内緒、ということだったけれど、撮影前に顔を合わせてびっくりした。みんな、今までに何度も共演したことのある人たちだったのだ。今回の主役は二十作品目ということもあって未来がメイン。脇役で出るような人たちではないのに、と思っっていると、みんな――幸太郎、モトキ、大輔――が次々に「二十本目おめでとう」と声を掛けてくれた。

「ありがとうございます！」

二十代半ばから三十代半ばまでの計三人。触れ合ったことがあると思うと、甘えやすい。

「たくさん遊ぼうね」

「はい！」

半袖半ズボンの上にパーカーを羽織り、バスに乗り込む。どうやら本当に遠足気分に合わせてくれるらしく、お菓子和ジュースまで渡された。

「はい、ミク。チョコレート」と大輔から一口サイズのを三つ。

「すみません」

「俺からはクッキー」と幸太郎。そして最後はモトキが「ミクちゃん、僕からはマシユマロ」とこちらも個包装のそれをくれた。

「ふふ」

次々に渡されるお菓子。膝の上から溢れそうになったのを見て笑っていると、前の座席にいた監督が背もたれの上から顔を出して言った。

「早速可愛がられてるね。今日はたくさんやんちゃして、我儘言っつて、甘えるんだよ」  
「はい」

「俺はおじさんだから体力がもつかなあ」

頭を掻きながら最年長の幸太郎が言うと、攻め役三人の中では最年少の大輔が笑った。

「公園で遊ぶなんて普段ないですもんね。俺、サッカーボール持ってきましたよ」

「僕は砂場セット」

「え、そうなの？ 俺手ぶらで来ちゃったよ」

「手ぶらじゃないじゃないですか。ほら、ちゃんとミクにお菓子買ってきてる」

「これはいつも」

「え？ そうなんですか」

「ミクくん見てるとお菓子あげたくなるんだよなあ……でも二人だつてそうだろ？」

攻め役の男優さんたちも仲がいい。色気はないけど、遊具を使わずに鬼ごっこも楽しいよね、なんて話をしながらお菓子を食べていると、前の席にいた監督から「着いたよ」と声が掛かった。

「わ……！」

バスを降りると、そこは本当に公園だった。撮影だし、アダルトグッズのついた遊具と聞いていたから遠足を模したセットだと持っていたのに、本当に、公園。青空の下で、木も生えた、地面は土の公園。

「……ここで、本当にするんですか？」

「そうだよ。でも大丈夫、一般人は来ないし、当然子供も来ないから」

みんなでのおしゃべりに夢中で外を見ていなかったけれど、どうやら子供向けの遊具があるのは広い公園の中の一角に過ぎず、大元の公園は背の高い木で覆われ、外からは見えないようになっていっているらしい。

「まずはみんなで遊具の確認をして、それから始めよう」

みんなでまとまって公園の中を見て回った。最初は砂場から。でも、なんの変哲もない普通の砂場だった。

「砂は抗菌のものを使ってるので裸で遊んでも大丈夫。当然石やゴミもないので目に入らないことだけ気をつけて思い切り遊んで」

「分かりました」

監督を見上げてしっかりと頷く。

「で、まずはここで着衣のまま遊んで、汚れたつてことで服を脱がせてもらおう。自然体で撮りたいので、脱がせるのはそのときの流れで誰でもいいから」

「分かりました」

男優さんたちが返事をする、監督は満足げに頷いた。そして身体の向きを変え、歩き出しながら続ける。

「脱いだ後も砂場で遊んで。それから、この蛇口で身体を洗う」

それは公園によくある水道と同じだった。監督が蛇口をひねると勢いよく水が流れ出す。けれど打ち合わせで聞いていた通り、触れてみるとお湯だった。

「バスタオル、持ってきてるね？」

「はい！」

スタッフがリュックを掲げるのを確認し、それから監督はお湯を止めた。

「ペニスは皮を剥いてしっかりと洗う。あとはお尻も。ミクくんは早く遊びたい！って嫌がっていいから。でもちゃんときれいにして、身体も拭いてから裸のまま飛び出すように遊びに行つて」

「はい」

恥ずかしい。でも確かに、小さい子供ならそうしそうだ。

「あとは自由に遊んでいいから。本来とは違う使い方でも危険がなければそれでいいし」「それってどういうことですか？」

本来とは違う、という意味が分からなかった。だって、シーソーにデイルドが設置されている時点ですでに本来の使い方とは全く違う。

「例えばジャングリズムね。裸で登るのを撮るのが目的だけど、パイプにペニスを擦りつけて遊ぶとか、陰嚢をぶつけたふりして痛がってみるとか」

「わ……」

想像するだけでいやらしかった。すでに気持ちはシーソーで遊びたいな、なんて気分になっていたけれど、今言われたこととしてみたい。

（それにそういう発想をしてるってことは監督も見たいって思ってるかもしれないってことだし……）

とにかく思いきり無邪気に、けれどえっちに遊ばばいいことだろう。

さらに歩を進める監督の後をついていくと、着いた先は滑り台だった。

「ちゃんとマットが敷かれてるけど、本当に怪我だけは気を付けて」

「はい」

見れば確かに周囲一面にマットが敷かれていた。それに打ち合わせで監督が言っていた通り、そもそも滑り台にはほとんど角度がついていない。でも、普通なら落ちないよう設置されている横の手すりのような部分がかなり低くできていた。恐らく横からでも陰部の様子がきちんと見えるようになるのだろう。

「大丈夫です、監督。ちゃんと見ていますので」

「うん、よろしく」

注意事項を聞きながらぐるっと一周して——鉄棒のところでは設置されたオナホルがペニスのサイズに合っているか、指で確かめるように言われた——無事に確認を終えた。

「じゃあ、今日はぶっつけ本番。カメラテストなしでいくから。カメラさんは日差しと影の向きに気を付けて」

「宜しくお願いします」

さあ始まるぞ、というこの瞬間はやはり緊張する。でもトラブルがあれば即座に止めてもらえることも分かっているし、カメラが回り始めるとまるでスイッチが入ったかのように、自分でも驚くほどスムーズに動けるようになって知っている。だからみんなと自分を信じて、あとは思い切り楽しめばいい。

「じゃあ、カメラ用意して」

「はい！」

『お城作る！』

設定は子供——だからタメ口で大輔に話し掛ける。そして大輔もまた、にこにこ優しい顔で『トンネルも作ろうか！』と返してくれた。

『お城にトンネルあるの？』

『あー……』

困った顔。それがおかしくてモトキと笑っていると、後ろから幸太郎の声が聞こえた。

『ミクくん、お水持ってきたよ』

『ありがとう！』

バケツに入れられたお湯。砂場の砂に掛けて、砂の山を固めていく。子供みたいに無邪気に遊ぶなんてできるかな、と家では不安もあったけれど、いざこうして気心の知れた優しい人たちと遊んでみるととても楽しくて。これがA V撮影だなんて忘れてしまいたいそうになる。

(すっごく楽しい……！)

まるで子供に戻ったみたい。みんなもニコニコ優しくて、居心地がいい。楽しいな、ずっとこうしていたいな、と上がり続けるテンションで砂の山を固めるために手のひらで思い切り砂を叩いた瞬間だった。

『っ！』

力を込め過ぎたらしい。濡れた砂が口に入った。口の中がじやりじやりする。



『ううええ』

『ミクくんっ!』

さつと手を伸ばし、抱き上げてくれたのは幸太郎だった。三人の中で一番筋肉質で、厚みがある。抱き上げられても一切不安は感じない。

『目は？ 大丈夫？』

『うええ……』

大丈夫、と頷きながらも舌を出す。口の中がじやりじやりして気持ちが悪くて。

『お口を洗おうね』

大輔とモトキが走って未来たちを追い抜いて行った。でも行先は水道ではない。どこに行くのだろうかと思っていると、幸太郎は二人を追うことなく水道に向かった。身体を下ろされるとすぐ、大輔とモトキが走り寄ってくる。

『うう』

『大丈夫、すぐにきれいになるからね』

『ほら、ミク』

大輔が持ってきた水筒で指を濡らし、こちらに伸ばしてきた。意味を理解し、思い切り舌を伸ばす。

『ああ、じやりじやりだ。たくさん入ったね』

優しい指がそつと舌の上を撫でた。細かい砂の粒が舌を擦って気持ち悪い。

『多いな。うがいしよつか。くちゅくちゅってできる？』

『ん』

渡された水筒のコップからお茶を口に含む。くちゅくちゅと口内で水分を動かすと舌はすつきりしたけれど、みんなのしている——カメラまで回っている前で吐き出しているのか分からない。

(どうしよう……)

『出してごらん』

(え?)

『ほら』

『べってするんだよ』

幸太郎に促され、それを補完するようにモトキが言った。すると、カメラがすつと寄ってきた。口から液体を出すところを撮るのだ、とようやく理解する。

(恥ずかしい……)

でももっと恥ずかしい液体を身体から出すところを何度も見られ、撮られている。そう思うと、これくらい……とも思えて。

『うう……ぺっ』

子供のように思い切り吐くと、みんなの空気が和らいだのが肌で分かった。

『上手。ほら、もう一回』

モトキが手を背中に添えてくれた。優しい手。初対面のときはこんなに穏やかで優しい人とどういう風にセックスしたらいいのだろうと悩んだこともあったけれど、この優しさがそのまんまのモトキなんだなあなんて、結局ほかほかした気持ちで撮影を終えたのを思い出す。

『自分でお口きれいにできて偉いね』

それから三回うがいをする、ようやくカメラが離れていった。マニアックな撮影だな、なんて思いつつ、もう一度幸太郎に甘えるように腕を伸ばす。

『抱っこ』

『うん、ほら』

サツとぶれることなく抱え上げられる身体。一応成人男性なんだけど、と思いつつ、未来は四人の中で一番小柄だし、身体も細い。筋肉はおろか、脂肪だつてつきにくいので薄っぺらい、だから幸太郎のような人を見る度劣等感を覚えるけれど、こうして抱き上げてもらえるからまあいいか、なんて。

『ブランコするか？』

『ううん、砂場』

『怖くないのか』

優しい気遣いに胸がむずむずした。仕事で子供扱いされているだけとはいえ、すごく愛されている気分になる。

『ん、怖くない』

ちゃんと答えれば、幸太郎の足は砂場に向いた。そしてもう一度砂の上に下ろしてもらい、プラスチックのスcoopを持つ。

『お城！』

大きな山を作り、トンネルを掘って。結局お城とは全く違うもの——ただの砂の山——ができあがったけれど楽しかった。

『はは。ミクちゃん、砂だらけだよ』

(あ……)

きた、と思った。でも何も知らないふりをして笑顔を返す。

『ん、お砂楽しい！』

スcoopを片手に笑って言えば、モトキが相好を崩した。

『可愛いけど、砂だらけだよ。お洋服、一度きれいきれいしようか』

『や！ 遊ぶ！』

『ミク、いいこだから』

入ってきたのは大輔だった。一番年齢が近いからか、幸太郎やモトキよりも少し言い方が厳しい。

『うー…』

ぐずる声を出しながら舌を突き出す。すると、モトキが苦笑しながら手を伸ばしてきた。頭を撫でながら、優しい声で諭すように話す。

『ミクくん、まだまだたくさん遊べるから。でもいやいやって言っていると、その間に遊ぶ時間が減ってしまうよ』

『うー…じゃあきれいな…』

脱がせるのは誰でもいいと言っていたな、と瞬時に考え、幸太郎に手を伸ばす。

『して』

『うん』

一瞬モトキにしようかと悩んだ。けれどなんとなく、一番年上である幸太郎がよかったのだ。

(大輔くんは…こないだのがなんとなく…なあ…)

直近の共演の、撮影後。余韻に浸っていたのかどうかは分からないけれど、頭を撫でられ続けたのが不思議だった。

(別に嫌だったってわけじゃないけど…)

こんな風に思うのは、『自分は監督のもの』という意識が芽生えたからだ。それがなければそんなことに違和感を覚えることもなかった。そして今もきつと、大輔に脱がせてもらっていただろう。

そのままちよこんと座っていれば、幸太郎は丁寧に服を脱がせてくれた。ちゃんと台本通り、下着まで全てを脱がされ全裸になる。

(恥ずかしい…)

外で全裸になるなんて初めてだ。誰も入って来ないとはいえ、やはり心もとない。

『もう遊んでいい？』

このままもう一度砂場で遊んで砂だらけにならないければ。さっきの台詞からすると『服をきれいに』するのだから、本体である未来には関係のないことだ。

『うん、どうせたくさん汚れちゃうからこのまま遊んじゃおう』

幸太郎が服の砂を払っている間に大輔とモトキと砂場遊びを再開した。水を吸って色の濃くなった部分を集め、丸めて泥だんご。

『見て！ おっきいのできた！』

『わあ！ ミクちゃん、上手だね』

『ほんとだ！ ミクはおだんご作りが上手』

大輔もモトキも甘やかすのが上手い。そこに服をベンチに置いてきた幸太郎が戻ってくる。

『お、今度は泥だんごか』

そう言っただけのように泥を丸めると――

『わっ！』

『ははっ！』

『あっ！』

『えっ？！』

投げられた。当然当たったのは顔ではなく身体にだし、勢いもなかったけれど。

『うー！』

痛みは全くない。でも身体が泥だらけだ。もしかしたら時間を巻こうとしているのかもしれない。

(服を脱ぐ前に遊び過ぎちゃったかな)

『幸太郎くん、ミクが汚れちゃったよ』

『悪い悪い、避けるかなって思ったんだけど』

そう言っただけなのに、幸太郎は本当に傷付いたような顔をした。無理がある。でも、きつと覗いている人は気にならないだろう。もしかしたら砂遊びなんて早送り飛ばす人の方が多いかもしれない。いや、そもそも編集でバツサリカットということだってあり得る。

『身体を洗いに行こう。ごめんな、ミクくん』

『うー…：幸太郎くんや！』

『えっ…：』

演技で言っただけなのに、幸太郎は本当に傷付いたような顔をした。

(演技…：だよ？)

それにしてもちよつとリアルで、モトキと大輔も一瞬ぼかんとしたけれど、すぐに大きな声を上げて笑った。

『幸太郎さんが泥だんご投げるからだよ！』

『そうだよ！ ミクちゃん、身体洗いに行こうね』

モトキと大輔に手を引かれ、だらりと垂れたペニスを曝したまま水道に向かって歩くと、その後ろを幸太郎がとぼとぼついてきたちよつと可哀想だなと思ったけれど、これもきつと演技の一つだろう。「これでいいよね？」という意味を込めて二人を交互に

見上げると、にこりと微笑んでくれた。

「ミクちゃん、身体きれいになってからまた遊ぼうね」

「うん！」

ちら、とモトキの視線がペニスにいったのが分かった。応用に視線をやると、歩く振動に合わせてペニスがゆらゆらしているのが目に入った。

（あっ……やばい、これすごい恥ずかしい……）

三人とも服は着ているのだ。全裸なのは未来だけ。両手を二人に繋いでもらっているので身体を隠すこともできない。しかも、ペニスが萎えているのがなんだか余計に恥ずかしく思えて。

（勃起の方が見られ慣れてるんだもん……）

いやらしいビデオなのだから勃起しているのは当然だ。だからこそ、無防備な柔らかいペニスを見られるというのがどうにも恥ずかしくなってしまう。

（あ、でも洗われたら……起っちゃうよね……）

萎えたペニスが恥ずかしいと思いつつ、これから勃起するのだと思うとそれはそれで恥ずかしい。やはり、結局は何でも恥ずかしいし、なんでもいやらしい気分繋がつてしまうのだ。

『あ、おちんちんも汚れちゃったね。おしっこの穴、ばい菌入るとよくないからきれいにしよう』

蛇口前に着いてすぐ、ペニスに手を伸ばしてきたのはモトキだった。身を任せるように、促されるまま膝をつく。

『おちんちん、きれいきれいにしようね』

大輔は横からじっとペニスを見つめていた。恥ずかしい。一对一の撮影ではまずありえないこの状況。複数プレイというのはこういうことなのだ。今頃理解して、身体が熱くなった。

（二人きりなら……相手もえっちな気分だったら気にならないことも多いのに……）

男優さんだって快感を拾う。最後は射精のためにペニスを刺激する。そのときはきつと快感に夢中になっているだろうから、例えばそのとき未来がどんなにいやらしい顔をしていたとしても気にされることはない。でも、こうして複数プレイとなると冷静に全体を見回されてしまうのだ。

『あっ……』

萎えたペニスをそっと持たれ、勃起していないせいで余計に余ってしまった皮を確認される。でもまだ、焦らすつもりなのか皮を剥いてはもらえない。その様子を、すぐ近くからカメラのレンズが捉えている。

『んっ……』

『うん？ ミク、どうしたの？』

まるでこのタイミングを狙っていたかのように大輔が言った。

(あ……)

今だ、と思った。目を閉じて、監督の顔を頭に思い浮かべて。

『……おちんちん、ばっちいのやだ……』

『ああ、そうだね。でもほら、おちんちんの中までちゃんと洗ってもらえるから』

応えたのは大輔だった。モトキがお湯を出し、温度を確認してからそつとペニスを引  
つ張られる。

『ぐっってお腹を出してごらん……そう、上手』

ペニスにお湯が当たった。普段身体を流すときはシャワーなので、一本の太い水流を  
受ける違和感に、感じてしまう。

(重いっ……)

強いというより、重いという印象だった。ぐつと水圧が掛かる感じ。

『うん、きれいになった。じゃあ次は中ね』

『っ……！』

まさかと思った。まさかこの水流のまま皮を剥かれるのか、と。

『ああっ！』

『ミクちゃん、えっちな声が出ちゃったね』

モトキは楽しそうに言うけれど、ペニスはきつい。それでなくても外気にも刺激にも  
慣れていない亀頭なのに、突然水圧で潰されかけるなんて。

『あああっ！』

『ミク、どうしたの？』

どうしたかなんて、ペニスをじつと見ている大輔が分からないはずがないのに——そ  
う思いながら、気付いた。

(あ……もしかして、また……？)

みんな、未来に『おちんちん』と言わせようとしているのかもしれない。恥ずかしい  
単語。でも、そういう言葉があった方が確かに見てくれる人も興奮するだろう。

『おちんちんむずむずするよう……』

『おちんちん？ どこがむずむずする？』

『さきっほ！ あとお腹のなか……』

『どんな風にむずむずするの？』

お湯を止め、モトキが訊いた。

『分かんない。お尻の中もむずむずしてる』

『お砂が入っちゃったかな。見せてごらん』

(え……ここで……?)

戸惑ったのは一瞬だった。視界の端にカメラが見えれば、どうしたって仕事という意識が戻ってくる。

『うん、僕のお尻、お砂が入ってないか見てえ……』

くるりと向きを変え、蛇口にお尻を向けるようにして四つん這いになった。裸のまま砂場に座っていたのだから砂がついているのは当然だし、次の遊びに行くとなればそこも洗ってもらうことになるだろうと思ったのだ。

『いいこ——ああ、すごくたくさんお砂がついちちゃってるね』

モトキが言うと、誰かの手がアナルに触れた。

『んっ……』

『きれいきれいしようね』

優しい手つき。お湯を掬い、掛けながら撫でるように洗われる。でもこれだけでは誰なのか分からない。幸太郎は前にいるのでモトキが大輔かのどちらかなのだけれど、誰か分からない手に陰部を洗われているのかと思うと——。

『ミクくん、勃起してきたな』

『っ』

『あれ、そうなの?』

大輔がお腹の横からペニスを覗き込んだ。そして手を伸ばし、先端に触れる。

『あっ』

『ほんとだ。まだ完全には起ってないけど』

『やあ……』

『ミクちゃん、お尻きれいになるの気持ちいいもんね』

優しい言葉と、続く手の感触で洗ってくれているのはモトキだったのだと悟った。

『モトキくん、お尻きれいになった?』

『うん、なったよ。でもタマタマもきれいにしようね』

もう、水流でそちらもきれいになっただろう——でも、プレイだから。撮影だから。

『うん、僕のタマタマもきれいに……』

『お、ミクくんはちゃんとお願いができて偉いな。いいこのミクくんに俺からのプレゼントだよ』

未来の頭を一撫ですると、幸太郎が背後に消えた。プレゼントなんて、そんな話は台本にはなかった。でも、撮影ではよくある話だ。監督のちよつとした悪戯というか、リ

アリテイを出すための内緒の演出。

『ほら、ミクくんが大好きなやつだよ』

その言葉に、まさかも挿入されるのだろうか、と焦った。アナルはしつかりと慣らしてあるけれど、挿入に足るほどのローションは入れていない。こんなことなら体温でとける固形ローションを入れておいたのに——と思いつながらも、監督が未来の身体に傷を作るような演出をするだろうか、とも思えて。

『僕の大好きなのってなあに？』

『ん？ 白くて甘いのだ』

正直、全く分からなかった。AVなので『白いの』と言われれば精液が思い浮かぶけれど、甘くはない。恋人同士のプレイでは『甘い』『美味しい』と表現することもあるけれど、子供としてのプレイ中にそんな表現を使うとは思えなかった。

『なに？ おしえて』

『ん、待ってな』

いつの間にか蛇口は閉まっていた。そして、ぬるりとした温かいものをアナルに感じる。

『あっ！』

舐められている、と瞬時に分かった。アナルを、幸太郎が舐めている。お尻の肉を割り、顔を埋めるようにして。

『ああんっ！ あっ』

気持ちいい。アナル舐めは、大好きだ。

『ああっ！ あっ、あっ！』

好きだけれど、恥ずかしすぎて、そして申し訳なくて相手にねだれたことはない。でも数回経験があつて、とてもとても好きなやつ。

『ああっ！ あんっ！ あんっ！』

声が大きすぎるだろうか——ここは外だ——けれどどうにも嬌声が止まらない。

『あああっ！ こう、た、あんっ！』

『ミク、可愛い。お尻舐められるの好きなんだね』

『あっ、あっ、やあっ！』

お尻を舐められていることに気付いていると表現してもいいのか分からなかった。だって、子供が舌の感触だと理解できるだろうか……だからごまかすように首を振る。

くくくく



「撮影の後はおうち、でしょ」

忘れていたわけではない。でもシャワーも浴びていないし——浴びずに身体の確認をすると言われていたことも当然忘れたわけではない。しかし、今回は砂がついているのだ。だから家にお邪魔する前に清めたい。

「それとも用事ある？」

「いえ、ただ砂が気になって」

「うん、乳首にもついてるかもね」

「っ……っ！」

監督は笑いながらアクセルを踏んだ。けれどその笑いはすぐに消えて。

「頑張ったね……すごく可愛かったよ。でもその分疲れたでしょう。着いたら起こすから、そのまま眠ってしまったってかまわないよ」

「身体中、愛されたね」

監督の住むマンションの浴室。服も着たまま玄関から直行されたのは、他人に抱かれた身体で室内に入ってほしくないからなのか、それとも砂が気になったのか。

「……監督……」

もしかしたら触れたくもないかもしれない……そう思ったけれど、監督はまるで服の皺の一本一本まで確認するかのように丁寧に丁寧にゆっくりと上衣を脱がせてくれた。それだけで不安は霧散し、いやらしい気持ちになってしまふ。

「ああ……この乳首……お砂遊びをしていた乳首だね」

「あっ……や……」

見られていたことは当然知っている。でも撮影中のことを話されると、やはりどうしたって恥ずかしい。

「あんなえっちなこと思いついちやうなんて……これから野外プレイの要望ばかり届きそうだし」

監督がくすくすと笑った。怒ってはいないようだし、どうやらひいてもいなさそうだけれど、監督の言葉に喜んでいいのかも分からなくて。

「お砂、気持ち良かった？」

「……ん」

「ん、じゃ分からないな」

「はい……お砂、気持ち良かったです……」

「ど……」

「……おっばい……」

まるで今日の撮影を復習するかのような時間。でもまだ、上衣しか脱がされていない。  
(このまま最後まで続けるのかな……)

疲れはもう感じなくなっていた。それよりも胸の高鳴りの方が深刻で。ドキドキしすぎて、息苦しいくらい。

「右と左……未来くんは右のおっばいの方が好きだったね」

「っ……、なんっ」

「見ていたらよく分かるよ。未来くんの好きなどころ……これは俺以外でもみんな分かっている。カメラマンさんだって音声さんだって……小道具さんやメイクさんも知ってるんじゃないかな」

「やつ……」

そんなに知られているなんて。でもどうして分かるのだろう。左だって、同じくらい気持ちいいのに。

「可愛いね……みんながどんな目で未来くんのこと見てるか、知らないんだ」

「え？」

「ううん、こつちの話。今度砂を買って来るよ。なかなかプライベートで野外プレイはできないから、おうちでお砂遊びしようね」

どうやら監督は幼児プレイを今後も続けるつもりらしい。そのことに不満はない。むしろ今日の三人のように監督に甘やかしてもらえるというのなら、それはとても嬉しいことだ。

「ん……お砂……」

「お砂の中におちんちんも入れていたね。さあ、見せて……怪我も心配なんだ」

ズボンと下着、靴下も脱がされれば全裸だ。今日、ほとんどの時間を過ごした格好。なのにとっても恥ずかしい。

(監督しか見てないのに……監督だけだから、かな……)

撮影中より近い距離。視線でも分かる熱。

「ああ……可愛い。怪我は……大丈夫だね」

「ん……大丈夫です……」

怪我というほどのことはなかった。泣いてしまったけれど、その後砂で擦ったりオナホールで扱いたり、三人に代わる代わる違った触れ方で弄られたのだ。それでも快感しか覚えなかった。

「まだお砂が残っているかもしれないから、あとでしっかりと洗おうね」

「ん……監督」

「うん？」

「洗ってくれますか……」

幼児プレイ。男優さんには「おちんちん洗ってえ」なんて言い方をできたのに、監督にだけはどうしてもできない。

「うん、手で優しく洗ってあげる」

四つん這いになって、と言われて床に敷かれたマットの上に膝をついた。そして今日一番弄られたアナルを曝す。

「……ここ……赤くなってる」

「あっ……」

アナルに触れたのは恐らく指先だけ。それなのにすごく敏感になっていた。まるでアナルが熱を持っているみたい。

「舐められたし、遊具ではディルドを啜えていたね」

「ん……」

「何が一番気持ち良かった？」

「飴……」

「ああ……すごく悦んでたね」

スン、と音が聞こえた。同時にお尻の辺りの空気が吸われる感触。

「あんっ！」

「うん、甘い。でもその後、たくさんおちんちんを啜っていたね」

「っ……や、や……」

やだ、と思わず言ってしまった。だって三人分のペニスを啜えたアナルの匂いを、大好きな監督に嗅がれているのだ。

「いいんだよ。俺が指示したんだから。ミクくんのお尻、たくさん弄って気持ち良くしてあげたって」

「あ……あっ……」

ぞわ、とした。

「乳首もおちんちんも弄られるのが大好きだから、たくさん弄って可愛くしてあげてっ  
て」

「あっ、あっ……」

お尻の穴がきゅううう……と締まった。中に何も無い違和感に、アナルが気付いてしまったような感覚。

「下のお口で食べる飴は美味しかった？」

「あっ……」

熱い吐息が漏れる。返事をしなくちゃ、そのときにどう感じていたのかを思い出さなくちゃ、と思うのに頭が回らない。

「あの飴、俺が買ったんだよ」

「え……」

「これをミクくんのお尻に食べさせてあげてって」

「っ……監督が……？」

「そう」

せいぜい小道具さんが用意したものだろうと思っていた。それか、男優さんの誰かが差し入れのつもりで買ってくれていたものだとばかり。なのにまさか監督自身が……でも、それなら監督は未来があのだと好きだということを知ってくれていたということだ。ちゃんと銘柄まで。そう思うと嬉しくて。

「監督……嬉しいです」

「俺も、未来くんがたくさん上手に食べてくれて嬉しかったよ」

「アナルに柔らかいものが触れた。」

「あっ……」

キスだ。普通なら絶対にされないようなところにキスをされている。

「ここ、舐められて気持ち良さそうだった」

「あっ……あっ……」

尖った舌先がアナルを舐めた。洗ってあるといっても、ただ水道で流しただけなのに。

「熱持ってる……たくさんおちんちん啞えたもんね」

「あっ、やつ、」

他人のペニスが入っていたと知りながら、どうして舐めることができるのだろう。しかも、お尻の穴なのに。

「こんなに火照ってぼてつとするまでよく頑張ったね。最後、未来くんは勃起もできないほど疲れてたのに、このお尻はちゃんと三本のペニスを射精させてあげて……」

「ああああっ……！」

言葉のチョイスが巧みだった。三本のペニス……射精させてあげて……。

「アナルだって遊具では身体の固定に使われて疲れて……ああ、でも酷使のお詫びに飴だったのかな……お詫びというよりご褒美、かな？」

「あっ、あっ」

話している間は舐められていない。でも視線は絶えず感じていた。

めちゃくちゃ長いです……

12万3千字超。

よろしく願いいたします！

ちゃんとした恋

gooneone (うーわんわん)

2020 / 10 / 17

メール: gooneonegooneone@gmail.com

pixiv: 19591291

Twitter: @gooneone11

5R5R: gooneone

